

# 人生はラグビーボールと おなじ

## スタンドオフ

「キックには自信があるんですよ、最初サッカーから入ったんでね」

やっちゃん——株式会社サトキン代表取締役社長・大塚康幸は、グラウンドの芝の上にボールを立てると、ゴールに視線を送った。ジャージの胸には「Four Years」と筆記体で刺繍されている。農二（東京農業大学第二高等学校）ラグビー部のOBチーム（同の4年会）のユニフォームである。

「私が1年生の時、花園に初めて出てから4年間（農二は）出場できなかったんですよ」「花園」とは、全国高校ラグビー大会が開催される大阪の花園ラグビー場のことであり、大会そのものを意味する。全国高校ラグビーの聖地である。

やっちゃんがプレーキックした楕円形のラグビーボールは、くるくる回転しながら陽盛りの空に美しいカーブを描きクロスバーを越えていった。

背中にある「10」は、スタンドオフの背番号である。スクラムを組んだフォワードから最初にボールを受け取り、そのプレーが攻撃の基点になることから「司令塔」と呼ばれる花形ポジションだ。

やっちゃんはラグビーを愛している。そして、かつては憎んでもいた。

## 三男坊

長男はまじめ、次男はやんちゃ、三男のやっちゃんは、そうした兄たちを冷静に観察し、両極どちらにもなるまいと思った。そして、また、なににでも興味を持つ、好奇心旺盛な子どもでもあった。テレビでなにか珍しいものを見つけると、「あれなに？」と傍からきく。そんなやっちゃんが強く惹かれたのが、アメリカのドラマ『奥さまは魔女』。やっちゃんは、魔女のサマンサ（エリザベス・モンゴメリー）に恋をした。それは、日本とはまったくちがう海外の生活様式への憧れでもあった。

一方、サッカー少年だったやっちゃんは、父・喜八郎氏が開校した高崎ラグビークラブに入る。銀行員の喜八郎氏は学生時代ラグビー一筋に邁進し、このスポーツを広めようと毎週日曜日に県内初のラグビースクールを開いたのだ。

中学に進学したやっちゃんは、ラグビー部がなかったことからサッカーをつづけた。サッカー部ではキャプテンだった。

やっちゃんはラグビーが心から好きになれなかった。ふたりの兄が最後まで全うできなかったラグビーを、せめて父のために自分がプレーしようと決めた。だが、やるからには一流でなければならぬ。口にできない重圧が、やっちゃんにのしかかっていた。時には、サッカーを優先し、日曜日のラグビースクールを休むこともあった。

次ページへつづく

株式会社サトキン／代表取締役社長

# 大塚 康幸

おおつか やすゆき



## 最終的に責任を負わねばならない者の決断こそ

農二に入学。当時は全国大会の出場経験こそなかったもののラグビーの強豪校である。一年生にしてやっちゃんは、フルバックのレギュラー選手で予選出場した。そこでミスを犯す。相手がキックしたボールを何度も落としたのだ。制裁として、レギュラーから外された。けれど、ぜんぜんかまわなかった。相変わらずラグビーが嫌いだったから。

農二は決勝トーナメントを勝ち抜き、初の全国大会に出場したが、フルバックの選手が怪我をしてしまった。自分に声がかかることを恐れたやっちゃんはベンチから逃げ出した。

そんなやっちゃんだったが、3年生では部のキャプテンに。ポジションもスタンドオフとして司令塔を務めるようになる。だからといってラグビーが好きになったわけではない。そんなやっちゃんを監督はしごきつづけた。公式戦でタックルを受けて頭を打ち、入院したら監督から病院に電話があった。「いつまでそこにいるつもりだ！」

そんなものだから風邪で授業を休んでも、部の練習には欠かさず出た。「監督には3年間殴られっぱなしでした。あのスパルタのおかげで根性だけはつきましたよ。それだけはまちがいないですね。なにこそって根性が」

3年生の秋に、父の母校、明治大学ラグビー部のセレクションを受けた。だが、やっちゃんはこれに落ちる。推薦ワクは、すでに夏中に埋まっていることを知らなかったのだ。甘かった。だが、こうしたところに、自分のラグビーに対するいまひとつの情熱不足があらわれてしまうのだろう。

それでも、このセレクションで、「前へ」の言

葉のもとに明治を名門に育て上げた名将・北島忠治監督の眼に留まった。やっちゃんは、ただひとり浪人生として明治ラグビー部の練習に参加することを許された。

長野・菅平での夏合宿では、事前に走り込んで参加したやっちゃんの仕上がりが具合が際立っていった。冬期はスキー場になるダボスエリアをやっちゃんは先頭切って走り抜けた。そうして合宿最後の紅白戦。北島監督じきじきにレギュラー選手の名を呼び上げ、ユニフォームが手渡される。やっちゃんは一瞬耳を疑った。スタンドオフで自分の名が呼ばれたのだ。北島監督から渡されたのは背番号〔10〕のジャージだった。

そのまま11月のセレクションを受けていれば入学は確実だったろう。ところが、魔がさした。合宿から帰ったやっちゃんはパンチパーマで街を闊歩していた。それを先輩に見られた。生意気と評判が立ち、そうなるに反発心もあってそのまま練習に出た。先輩から呼び出しがかかった。その呼び出しの声にも応えず、以後、練習にも顔を出さなくなった。

「結局、自分に負けたんです。弱かったんですよ。だから逃げたんです。そうして、この後の一時期、「逃げることを繰り返したんです」とやっちゃんは言う。

### 出会い

セレクションで法政大学に入学。だが、5月には退学していた。ラグビー部は全寮制だったが、ここでも上下関係に嫌気がさしていた。

ラグビーを失ったやっちゃんの心に、幼い日のあの思いがわき上がる。「サマンサに会いたい！」いや、アメリカでなくてもどこでもいい、やっちゃんは海外を目指す。

旅費を稼ぐため、夜はビジネスホテルのフロントで、昼は鋳造会社・佐藤金属工業で働いた。社長の佐藤正雄氏は、グラインダーで作業するやっちゃんを、「仕上げが上手い」と褒めてくれた。

やがて、縁故を頼ってオーストラリアに渡る。アスベスト除去作業、深夜のデパートのワックスかけなどの仕事をしながら1年ほど過ごした。やがて、知遇を得たオーストラリアの友人と協同で、ミートパイのファストフードの日本出店を目論んで帰国する。東京、大阪の百貨店などを中心に1年ほど営業展開するが、不発に終わった。やっちゃんは輸入した冷凍パイ1万個を売りさばくため、高崎駅前に出店するが、こちらも10か月ほどで閉店の憂き目に合う。

この間背負った借金を肩代わりしてくれたのは父の喜八郎氏だった。やっちゃんは、それを返済すべく製造業の三交替の現場で働く。この時ももらった日給の8千円が、長く無給だった身にはひどく嬉しかった。

そんなやっちゃんに、かつてのアルバイト先、佐藤金属工業から声がかかる。同社はいっと倒産し、専務だった佐藤誠一氏が代替わりして社長となり、バラックのような貸し工場場で再出発したところだった。

「うちで営業をやらないか」という佐藤氏の言葉に、「おれに営業ができますかね？」ときき返すやっちゃん。そんな自分を、「甘えてた

んですよね」と振り返る。佐藤氏は、「それはおまえじだい」と一蹴した。佐藤氏は自分に甘えていない。このひとはいちど地獄を見ていると思った。会社が危ないという風評が立ちはじめたある日、従業員がひとりも出社してこなかったこともあったという。だからこそ、いまはなにかもをオープンにするという経営方針で臨んでいた。

佐藤氏は、借金の返済に充てるとボーナスの前渡し金を支給してくれた。

### ラグビーボール

やっちゃんがかむしゃらに働いた。会社も勢いを取り戻した。

入社して8年経ったやっちゃんは、「あと2年で節目の10年なので、それを機に独立したい」と告げた。それを聞いた佐藤氏は、「節目なんて関係ない」と言い、自分に代わってこの会社を見てくれないかと提案してきた。佐藤氏には、経営者として他社からオファーがかかっていたのだ。

常務となったやっちゃんは、競売物件を見つけ工場移転を決意する。プレハブの事務所が付属していたが、それも取り壊して新しく建てなおすことにした。以前の工場は雨が降ると、穴の開いた屋根から滝ができた。そんな職場では、若い社員を採用しようとしても面接で逃げられてしまうことが何度もあった。新築した事務所を見た社員は、「これで家族を連れてこられます」と喜んだ。

ところで常々疑問に思っていたことがある。自分が“右”と進言したことに対して、佐藤氏

は必ず“左”と判断した。あれはなぜだろう？

自分も熟慮したうえで意見だ、それをこごとく反対に舵を切られるというのは……佐藤氏は自分のことが嫌いなのだろうか？ そう考えたことさえあった。だが、自分がトップという位置に立ったいま、やっちゃんにはわかる。それはナンバー2だった自分と、最終的に責任を負わねばならない者との決断の違いなのだ。そう素直に思えるのも、多くのひととの出会いがあったからだ。地元製造業若手経営者の“学校”ともいべき高崎青年経営者協議会の先輩・仲間たちとの付き合いがそうだ。彼らは、時に厳しい助言を与えてくれ、また、やっちゃんが不渡りを喰った時も我がことのように涙を流して慰めてくれた。

やっちゃんは、自分がいまの会社に呼ばれたのは、仕上げの腕を認めてくれた先々代の正雄社長の口添えがあつてのこと、と思っていた。しかし、自分に声をかけてくれたのは、あくまで誠一氏だったのだ。アルバイト時代、「大塚君みたいな若いひとがきてくれてよかった」と話す、まだ専務だった誠一氏と納品に行ったことを思い出す。

昨年6月、吉井町が高崎市に編入したの

を機に社名をサトキンに変更。新たなスタートを切った。

「楕円形のラグビーボールは右に転がるか左に転がるかわからないところが好き。ただ、蹴れば確実に前向き(!?)には転がっていく。人生とおなじですね。ラグビーボールにはロマンがある。またプレーがしたくなったな」

いま、やっちゃんはラグビーを愛していると素直に言える。

(取材・文=上野 歩)



スポーツタイプ高性能一体型キャリバー。製品の中にアルミパイプが錆包まれている。

### Company Profile

◆会社名 株式会社サトキン  
◆所在地 群馬県高崎市吉井町 309-8  
◆TEL/FAX TEL: 027-320-3655  
FAX: 027-320-3656  
◆設立 1988年  
◆資本金 2,000万円  
◆従業員数 20人  
◆事業内容 砂型鋳造、銅合金・アルミ合金鋳造、その他関連品

◆得意&特異技術  
大型船舶用ポンプ(銅合金鋳物)  
プレーキキャリバー(アルミ鋳物)  
ヒートシンク(アルミ鋳物)  
ローターステーター(銅合金鋳物)

◆注文・製品に関するお問合せ  
担当: 大塚康幸 TEL: 027-320-3655

エミダス会員番号: 47507